レモンスカッシュ・カフェ

たかはた けいこ

繊研新聞社

レモンスカッシュ・カフェ

たかはた けいこ

レモンスカッシュ・カフェ

一九九八年九月二十五日　初版第一刷発行

著　者　たかはたけいこ
発行者　磯崎義文
発行所　繊研新聞社
〒一〇三―〇〇一五　東京都中央区日本橋箱崎町三一の四　箱崎三一四ビル
TEL　〇三(三六六一)三六八一
FAX　〇三(三六六六)四二三六

印刷・製本　有限会社フィート

乱丁・落丁本はお取りかえいたします。

© KEIKO TAKAHATA, 1998 Printed in Japan
ISBN4-88124-037-4　C0095

目次

ただじゃあおかない　・・・・・5
早く社会に出たいんです・・・・15
超えろ、ミユキ・・・・・・25
お代官会議　・・・・・・・35

二十四年間の小さな箱　・・・45
深い眠り・・・・・・・55
ネジ巻き時計・・・・・・65
金色の小さなピアス・・・・75
グリーンベルト・・・・・85
悪い癖・・・・・・・95
私の子供と会社の子供・・・105
僕のままの社会・・・・・115

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

いくつもの正解　・・・・・125
日だまりの住人　・・・・・135
ライオン丸　・・・・・・145
新米主婦　・・・・・・・155
個人の音　・・・・・・・165
生まれ変わったら、猫　・・・175
おけいさんの困惑　・・・・187
床下、床上、流れ好調　・・・197

笑うお月さま　・・・・・・・207
あとがき　・・・・・・・217

カバー・カバータイトル・中扉デザイン
スズキコージ
・
構成
有限会社フィート

ただじゃあおかない

懐かしいメロディーだな、とテレビの画面に見入る。若いころ流行(はや)った曲が、アレンジされてコマーシャルソングに生まれ変わっている。私は数年前から、若いタレントの名前と顔が結びつかなくなった。一方、最先端のファッションと紹介されている週刊誌のグラビアページは懐かしい。サボと呼んだ、ぽっくりのような底が厚い靴。裾が広がったズボンはパンタロン。ウエストを絞った小さなジャケット。アルバイトをして、生活費を切り詰めて、それらを一点ずつ買って着ていたころ。

「東京で着ているぶんには良いけどね」

母は顔を斜めにして、東京駅のプラットホームまで迎えに行った私の姿を見て言った。

新幹線が開通したばかりのころ。

「この恰好で浜松の家の周りを歩いたら、ただじゃあおかない」

子供を脅すときに必ず母は、最後に「ただじゃあおかない」とつけ足した。

「うん、わかった」

答えたけれど、（ふん、くそばばあ）と思った。

「あなたのご家族のことを聞いていい？」

面接試験が順調に進んでいるなと思うと、私は何げなくこの質問をする。

「はい、お父さんは……」

相手が答え始める。私は答えをほとんど聞いていない。「まったく。今の子は、言葉遣いも知らない」と、心の中で舌打ちをしている。

ここ数年、自分の両親や兄弟を平気で「さんづけ」で呼ぶ若い子が、気になって仕方がない。学歴も年齢も関係なく、平気で「お父さん、お母さん」を連発する。

私自身はいつ、だれからこのことを学んだのか覚えていない。けれど高校生のころには

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

目上の人には「父、母」と言ったし、友人と話すときは「お母さんがね」と、相手によって使いわけができていた。

テレビのトーク番組で、若いタレントが平気で「お父さんが、お母さんが」と話している。タレント本人より、彼らの親と同じ世代の司会者が平気で聞き流しているのに腹が立つ。

マスコミには人材がいないのか。司会者、アシスタント以外にもディレクターや、脚本家、その他たくさんの大人がいるはずなのに、なぜひと言、教えることをしないのだろう。

先日、高視聴率のうちに終わったドラマ。毎週、時間になるとチャンネルを合わせていた。テレビに向かって、怒鳴ったり、叫んだりするためだ。

主人公は建築家志望の若者。高名な建築家と知り合い、とんとん拍子に出世していく物語だ。初回から「こんなのあり！」と叫んだ。若者の恋人が、高名な建築家に「空から東京を見たい」と言う。次のシーンでは、チャーターした飛行機が、東京上空を飛んでいた。遊園地の飛行機でもあるまいし、思いつきだけで飛行機をチャーターできるものか。

若者は才能を認められて、一流建築家の仲間入りをする。前後から計ると、自己流で図

面を描いているだけで、建築士の資格を持っている様子はない。
私の本業の洋服屋は、技術と感性さえあればだれにでもできる。けれど、建築家は国家試験を通らなければできない仕事のはずだ。
「君は無資格ではないのか！」
若者に向かって怒鳴る。
高名な建築家ができあがった建物の窓ガラスが気に入らない、とたたき割るシーンもあった。
「次の窓も早く割れよ」
と叫んだが、建築家は同じガラスを割り続ける。まったく非効率な仕事ぶりだ。
そのガラスを入れ替えるのは二千万円の損失だから、いまさら変更はできないからだという。
建築費用は、軽く数十億を超えている規模だ。設計料だけで、数億円支払われるではないか。自腹を切れば済むことだ。思いつきで、飛行機をチャーターできるほどの財力と権力があるのだから。

「頭をもっと使え！」「何、考えているの。あんた！」。私はテレビに向かって、怒鳴り続けていた。

数年前に見ていた恋愛ドラマもそうだった。主人公は銀行に勤務していた。上司が私用で窓口の女の子を呼びつける。お客さまが並んで待っている目の前で「他の窓口をご利用ください」というプレートをカウンターの上に出す。

「客のおばさん。怒鳴れよ！」

と叫んだが、おばさんは黙って隣の列の最後尾についた。

平の行員の出張のために、ハイヤーが自宅まで迎えにくるか！　彼の恋人はブティックに勤務している。クリスマスイブに突然、棚卸しをオーナーが命じる。

「かき入れ時に、そんなことをするか！　オーナー失格！」

このドラマは途中で見るのをやめた。バブル時のドラマだからかと思っていたが、そうではなかった。今回のテレビドラマと根本は一緒だ。バカバカしさが変わっていないどころか、増幅されている。

こんな不条理が通るほど、世の中は甘くないのに、平気で垂れ流す大人がいる。そんな

大人に腹が立つ。

「ただじゃあおかない」と言った母は二十歳で私を産んだ。私は十八歳だったから、あれは母が三十八歳だったときの会話だった、と気づいたのはつい最近だ。私はそのときの母の年齢を十歳も超えて、もうすぐ四十八歳になる。「私は大人の一人なのだ」と改めて考えた。不条理なドラマを送り出しているのも、肉親を平気で「さんづけ」で呼ばしたまま、ほうっているのは私たち大人なのだ。

「あのね、私があなたのご両親を〝さん〟づけで呼ぶのは、ご両親に敬意を払っているからなの。でも、あなたがそのまま『お父さん、お母さん』と第三者に答えるのは、日本語としてはおかしいんだよ」

「はい、わかりました」

相手は素直に答えるけれど、きっと（何、言っているんだろう。くそばばあ）と心の中で思っているだろう。でも、いいや。くそばばあになることが、とりあえず大人の私が、今すぐできることだもの。

今年も六月から、新入社員の入社試験が始まる。今年の面接試験受験者全員のくそばばあになってやろうじゃない。と、開き直ってみることにした。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c